2度の定年を経験した

随　筆

川　邊　秀　昭*

それは平成7年1月17日の早暁のことであった．数回の激しい上下動のあと比較的長い時間横揺れが続いた．かつて経験した事のない大地震であった．飛び起きて枕もとの衣服を着た．物干に出てみると西の空に煙が立ちこめている．

幸なことに，我が家の住民は一匹の犬と共に全員無傷であった．書斎の本棚は本の重量のためか地震の揺れの方向のためか倒れてもいない．しかし台所の食器棚は倒れ，中の食器類は殆んど全滅の状態で瓦礫の山と化していた．家は傾き壁は所々はがれ落ちている．玄関のタイルはひび割れている．

とりあえず水道から出た水をやかんに採り古い型の石油ストーブで湯をわかし，餅を焼いて朝食を終えた．そうこうするうちに，ヘリコプターが飛びかい始め，救急車，パトカー，消防車のサイレンが鳴りひびき，電池式ラジオの音も聞こえぬ程の騒音が続いた．

連絡がとれたので最小限の身のまわりの品を車に積んで東大阪の親戚の家へ行くことにした．平素は1時間程度で行ける道のりであるが，夕方5時頃に出発して夜中の12時頃に到着した次第である．勿論道路は凹凸になり亀裂が入っている上に救急車等が優先して走り簡単には進めない．神戸の町は停電し，ガスは止まっているし，水道も少しの間出ただけで断水してしまっている．正にライフラインが停止している．しかし武庫川を過ぎた辺りからはネオンもついていて，地獄から天国へ来たという感があった．

この平成7年3月末日が小生の大阪大学定年の日である．定年前には最終講義をするのが慣習であるのでその準備のためもあって18日から大学へ出勤した．しかし講義のまとめをするような気分にはならないので，お願して最終講義を取り止めさせていただいた．阪神電車が芦屋まで動くようになってから暇が出来るとリュックサックの中に飲物と軽い食事を入れて東灘の自宅の跡片づけをした．最初の間は何から手をつけて行こうかと思い悩んで途方にくれていた．帰路には身のまわりの品をリュックサックにつめて運ぶことにした．リュックサックがこんな便利なものかと思ってもいなかったが，これが昨今では女性のファッションにまでなってしまい，高級ブランドのリュックサックまで出現したのには驚いている．

その後東灘区役所へ数回足をはこび「全壊」という震災証明書を発行してもらった．この間に色々な方々から暖い御支援をいただいたことを紙面をお借りして御礼申し上げたい．

さて大阪大学を定年退官してからは，園田前工学部長のお世話で岸和田にある労働者傘下の雇用促進事業団の運営になる大阪職業能力開発短期大学校の校長に就任した．初代の校長は基礎工から来られた吉信宏夫名誉教授である．学校の敷地は10万平方米あり事業団の26の短期大学校の中で最大規模の面積を持っている．ただ岸和田市の中心からは遠隔の地にあり，交通機関は朝2便，夕方4便の南海バスだけで所要時間は南海線の岸和田駅から約30分である．その後地元の府会議員，岸和田警察署，岸和田市，大阪府の皆様方の御支援御協力により1時間に1本のバスが学校まで運転されるようになった．学校は職員用合同宿舎をもっているが，車がないと通勤に不便であり，小生はペーパードライバーなので南海線沿線の「和泉大宮」駅の近所に下宿することにした．

学校が町の中心から離れているせいで空気が澄んでいて，東野田時代に1日で黒ずんだYシャツが千里に移転して2日間それがなんと3日目にやっと黒

*Hideaki KAWABE
1932年1月1日生
昭和31年 工学研究科応用物理学専攻修士課程修了
現在，工学博士，材料物性
TEL 078－452－6318
FAX　同　上

くなるという状態である．春になると朝から晩までウグイスが鳴きまさに高級ゴルフ場の感がある．また校長室の横の山茶花には目白が花蜜を吸いにやってくる．校舎の斜面には雪柳が一面に咲く．ただ土質が良くないので，樹は大きく育ちにくい．

学科は全部で８学科あり，生産技術科，制御技術科，産業機械科，電気技術科，電子技術科，情報処理科，産業デザイン科および産業化学科から成っている．学生定員は各学科共に20名で５～６名の教官(指導員という)が配置されている．

学校を受験するには高校卒業又は同程度の学歴が必要とされるが，社会人も受入れ可能である．しかし，１単位を取得するのに必要な教育の時間数は，文部系の学校の15週に比べ18週となっており，その分だけ休暇の期間が短かくなっている．始業は８時45分からで１時間50分の授業が１日に４駒組まれている．カリキュラムに占める実験実習の割合は大きく，「物づくり」の出来る実践技術者の養成が目的とされている．

平成10年に職業能力開発促進法(いわゆる能開法)が改正され雇用促進事業団が運営している26校の短期大学校のうち10校程度を大学校化することとなり，平成11年４月から先づ４校が発足することとなった．即ち相模原にある職業能力開発大学校が東京職業能力開発短期大学校と合併して職業能力開発総合大学校となり，大阪職業能力開発短期大学校が昇格して近畿職業能力開発大学校となり，近畿地区にある京都職業能力開発短期大学校および滋賀職業能力開発短期大学校は，夫々近畿職業能力開発大学校の附属の短期大学校となり，北九州職業能力開発短期大学校は九州職業能力開発大学校に昇格し，最後に沖縄職業能力開発短期大学校が大学校化されることとなった．

大学校化と云っても文部系の大学のような４年１貫教育ではなく，従来の短期大学校で行なわれていた２年制の教育を専門課程とし，それに新たに２年制の応用課程を積み上げる方式で４年間の教育を行なうことになっている．従って専門課程から応用課程に進学するためには一度試験を受ける必要が生じることになる．

応用課程を担当する教官は，専門課程の教官の中から選び出されて約９ヵ月の集中研修をうけて平成11年３月に各大学校に配置された．

近畿職業能力開発大学校の場合応用課程には４学科が設置されることになった．即ち生産機械システム科，生産電子システム科，生産情報システム科及び建築施行システム科で学生定員は夫々20名，教官数は当初各科共４名である．応用課程の増設にあたっては，学生の総定員を大巾に増やすことが許されず専門課程の８学科のうち産業機械科，電気技術科，産業デザイン科を平成12年３月末で廃止し，制御技術科及び電子技術科の定員を20名から30名に増員することとなった．しかしながら建築系の専門課程の設置は認められず応用課程の学生定員は全国規模の募集で充足されることとなった．かくして平成11年４月から応用課程の学生が入校したが，予算の関係で彼等のための研究実習棟の完成が平成11年の８月末となり止むを得ず前期の間は講義を主とし，後期になってから実験実習を行なうこととなった．

平成10年から平成11年にかけて企業におけるリストラのために失業者の数が増えて来たので労働省の指示で能力開発にだすさわっている機関で失業者に対して高度職業訓練を実施し再雇用の場を創出することとなった．従ってハローワーク(職業安定所)と連携して失業者のニーズに合致する訓練コースを設け，３月から６ヵ月間教育を行なうこととなった．講義室のやりくりはこの訓練の開始で益々大変になったが，教職員の努力で何とか円滑に事を運ぶことが出来た．

平成11年10月に政府の行政改革によって雇用促進事業団は廃止され，新たに雇用能力開発機構が発足したが，雇用及び能力開発に関する業務は新機構に継承されることになったので，大学校の運営に実質上の変化は生じなかった．

平成12年３月末に近畿職業能力開発大学校を68才の定年で辞めたが，専門課程の学生の就職率が65％程度と過去最悪の状態となってしまったのは至極残念である．「物づくり」の伝統の継承がさけばれている昨今，技術を身につけた学生の就職の場がないとは考えにくい次第である．

以上のように平成７年３月に大阪大学の定年をむかえ，また平成12年３月の西暦2,000年の年に２度目の定年をむかえた次第である．ただ小生が雇用能力開発機構に在任中に「だんじり」で有名な岸和田市に国立の大学校が出来たことはまことに喜ばしいことと思っている．